

ない、夫が實に残念だと云ふことを、アンドレイは繰返しく答へた、

『慈悲と云ふものには報酬の必要はない』

ライデヨンは斯う謂つて、やがて立上つてエビシヤリイを抱いて

『私等の順番が何日来るか、誰が知つてるだらう』

路こそ變れ運命の

路辿るべき人の身や、

時こそ異なれ、疾き遅き、

シヤロンの小舟に身を乗せて

還らぬ旅の纜を

何れ解くべき果敢なさよ、

『やがて君一杯飲まう、アンドレイ君一處に附合ひませぬか、』

『左様して頂けると難有いですわ』エビシヤリイは斯う謂つて、アンドレイの腕を握らうとしたが、アンドレイは代官の約束を依りに、さつさと辭し去つたので有つた、
(をばり)

九、鉛の兵隊

あの晩インフルエンザに罹つて熱が出て眠れなかつたずると忽ち寢臺の側の押入の硝子戸を、何やらカンカン〜と、明瞭と三度程続け様に叩く音が聞えた。

一體私は、其押入の中には、ドレスデン焼や、セヴレのビスケット製の人形や、タナグラ又はミクナの粘土像や、小さなレナイサンスの青銅製の置物や、日本製の象牙彫や、ヴェネチアのゴッブ、支那の杯、ヴェルニス・マーチンの箱、漆塗の盆、エナメル塗の小箱と云ふやうな實に限りもない役ざ物——要するに偶像崇拜と云ふ様な觀念が、自づと勿體ながらせる様な物と、夫を見ると其

鉛の兵隊

昔の悲しかつたこと、嬉しかつたこと二つながら之を思ひ出させるると云ふ力の有る物、此二つの點から集めた色々な役ざ物を、雜然にして藏つて置いたのて有る、叩いた音は弱かつたが至つて判然とした音で、燈光を依りに覗いて見ると、音の主は押入の中に、入れてあつた鉛の小さい兵隊さんで、夫が再び自由の世界に出やうと努つてるのだと分つた處が、努力の効空しからず、忽ちに其拳の力で、硝子戸がヒラヒラと開いたので有る、實を謂へば、人の想像する程に私は吃驚はしなかつた、元來此小さい兵隊さんの不審な態度は、此迄常に私の眼に映じて居たので、私が之を松前の夫人から頂いて以來二年と云ふもの、一日として色んな些細な事にも注意を怠らずに居たから、此兵隊さん

は佛蘭西の近衛兵で赤い筋のある青い制服を着て居る、そして此聯隊の訓練の不評判で有つたことは、誰しも知らぬものは無いので有つた、

『あゝ、い誰だ、ラッリップ、プリンダモリア、ラッリップ！最少し静かにして俺を眠せて呉れないか俺は具合が悪いなだから、』

私が斯う謂ふと、奴さん、哮る様な聲で謂つた、

『叔父さん、私は、ハム、ネオルの城を取つて、百年以來、變りませんでしたよ、あの城の上じや、随分、澤山飲んだものでしたなあ、處で私位な年輩な鉛の兵隊が、まだ澤山生きてるか、し、左様なら、私は此から、観兵式へ行か、にやならないから、』

私は之に對して、謹嚴な態度で謂つた、

『ラッリップ！お前の聯隊は、千七百八十九年の八月三十一日に、ルイ十六世の命令で、解散になつたんだよ、だから最う、お前は、観兵式に列する理は無いな、だ、あ、い、押入の中に居たら善いだらう、』

ラッリップは一寸口髭をひねつて、やがて輕蔑の態度で私の方を斜視に見て、反問した、

『何ですつて？、ぢや、年々、大晦日の晩、小供の寝てる時に、私達の、大觀兵式が始まつて、まだクリスマスの木の餘燼から、樂しさうに煙が立ち上つてる、煙突と煙突の間を抜けて、行列を作つて、屋根の上を、鉛の兵隊が進軍するのを、貴方は御存じないと仰有るのですか、何しろ、其時の進撃つたら、決死の勢で、澤山な騎兵が向、不見にお仲間入をする、戦にやられた鉛の兵隊の影は、交戦の最、』

中をサッサと逃げて行く、後に残つたものは曲つた銃槍や折れた劍の外に何にも無くなつて、そして死んだ人形の魂が月光の下に青白い顔をして、影の逃げて行くのを見てると云ふ風なんですよ」

私は此話を聞いて不審に思つて謂つた、

「成程ぢやあ前は夫が慣例——眞面目な風習だと謂ふ積りぢやな、俺は昔の風信習慣や、傳説口碑一般の信仰と云ふものは、大の尊敬家ぢや、夫が即俗傳とか野史とか云ふもので、研究上非常に興味ある題目だ、ラッリップ、お前が傳説の保護者で有ると云ふ事は、俺に取つては非常な満足ぢや、けれど之が爲に私はお前を其押入から出さなければならぬとは、全く思へないよ」

丁度此時本當に出してお上げなさらなけやなりませぬわ、と澄み切つた愛らしい聲が聞えた、今迄嘗て聞いた事のない聲ではあつたが私は直にタナグラの若い婦人の聲で有ると覺つた、此婦人は兵隊さんの隣に座つて、大きなシヨールに身を包んだ品の善い丈の高い女で、絶えず兵隊さんを見下ろして居た、

「貴方本當に出してお上げなさらなけやなりませぬわ昔から今まで傳はつて來た習慣と云ふ習慣は、一樣に尊敬の價か有るもので、ムいますよ、許すべきものと禁すべきものとは、今の人より昔の人の方が善く知つてますよ、何故だつて昔の人の方が神様に近いんですものを、左様すりや此ガラチアの人にも、祖先の戦争の儀式をすることが出来る様に、御許しになるのが唯至當

てすわ私共の時分には、まだ此の兵隊さんの様に、赤い筋の入つた可笑しな青い着物なんか着やしくつて、着物つたら只甲丈でしたよ、そして私共は、其兵隊さん達を餘程恐れてるし、兵隊さん達も野蠻でした、今見ると貴方が其ガラチア人の様に野蠻ですわ、貴方は色々な詩や歴史をお讀みになつたてすが、全く駄目です、人生の美と云ふ事に就いて、眞の觀念を有つて居仰らないんで、すもの、を、そして又私が家の庭の桑の古木の下で、常もミレタスの羊毛を紡いでる時分に、私の市場にお在住になりませんでしたわねえ」

私は強いて自ら氣を平にして之に答へた、

「愛らしいパニチスさん、貴女の時代のつまらない希臘の人間

は、賢明い人が眼で見ても、心で観ても、決して怠屈しないと云ふ程美しい、或る形式を考へたのですが、あれつ計の藝語なら、貴女の市場で毎日毎日聞かれる位で、夫丈で以て俺の市の會議なら、丁度一期間位苦もなく開かれさうじや、左様云ふ次第じやから、俺はラリツサや、タナグラの市民として生れなかつたと云ふことが一寸も悔しくない、同時に俺は貴方の説が尤もだと云ふことを承認して置きます、成程習慣が維持せらるべきものだ、と云ふことは至當な事で、さもなくば習慣と云ふものが存在しなくなる等ですわねえ、昔の桑の木の下でミレタスの羊毛を紡がれた美人パニチスさん、貴方の結構な忠告は駄目なものじやなかつた、私は御忠告に従つて、ラッリブに何處へても俗傳の招く所

へ行く事を許すとしませうから』
 するとセツレのビスケット製の牛乳搾の小姑娘は製酪器の上
 に両手を休めながら、何だかお願がと云ふ様な風で私の方へ向
 いて

『御主人様何卒兵隊さんを行かないやうにして下さいまし彼
 の人は妾と結婚の約束をしましたた彼の方は誰にても出遇ふ女
 に惚れ込むのですよ、だから彼の方が行つて了へば妾は二度と
 彼の人に出遇いませぬから』

女は斯う云つて、肥つた頬を前垂て隠してよよとばかりに泣
 き初めた、

ラッリップは自分の上着の飾の様に、其顔を真赤にして、さも此

場に堪え切れぬ様子で有つた自分て犯した罪の恐しさに、人の
 攻撃に耳を寄せることが極めて辛かつたからである私は力の
 及ぶ限り小娘を慰めて、そしてチルツエの洞窟で觀兵式の濟ん
 だ後は、決して方々を迂路付かざらんことを兵隊さんに願つた、
 兵隊さんは誓つた私は暇乞を云つたけれども兵隊さんは直に
 出發しやうともせず、周圍に散らばつて居る立派な玩弄物の様
 に、チンとして棚の上に突立つて居る私は吃驚した様を彼に見
 せ付けた、

『お待ちなさい』と兵隊さんは叫んで『そんな風にあなたに
 見られて居ては不思議な世界の規則といふ規則を悉く壊はし
 てもしなれば、とても今出發することは出来ません、貴方がお

休みになつた後、私は容易に月の光を便りに逃げ出させう、私は色んな術策を知つてますから、けれども大急ぎをやるには及びませぬ、まだ一二時間は待つことが出来ます、處て話より外に慰みになるものは無いから、望とあらば何か昔の話を致しませうか、私は此處話を澤山知つてますよ、

『ゑ、何卒か一つ』パニチスが云つた、

『何卒か一つ』と小娘が又謂つた、

『ぢや、さあ始め給へ、ラツリップ、』自分の順番が来て私も謂つた、彼は坐つて、煙管に煙草を充いて、麥酒を一杯呉れろと謂つて、やがて咳拂をして其話を始めた、

* * * * *

丁度九十九年前の今日、私は十二人の仲間と一處に圓い食卓の上に立つて居ました、そして其仲間と云ふのは、丁度私の様で、宛がら皆私の兄弟のやうで有つた、ところが中には立つたものも有る、坐つたものも有る、四五人は頭か脚かに傷さへして居つた、つまり私共は、其前の年、聖ジャーマンのお祭で買つて來られた箱入一組の鉛の兵隊の生き残り、残つた傑物なんてして、室には薄青い絹の幕か垂れてあつた、中にはオルフェウスの祈禱書が開けた儘に載つて居る一弦琴、背部が琴の形をした椅子が二、三脚、桃花心木製の女の机、薔薇の飾のある白の寝台などが有つて、蛇腹の周圍には家鳩が澤山止つて居つた、有りとし有るもの、悉く人の心を魅する様な配合で有る、ランプは柔さしい光を投

げて竈の焔は黒闇に縛つ翼の様に揺れて居る打袷を着て机の
前に坐つたジュリー夫人は、壯麗黄金の糸を欺くやうな髪毛を
クル／＼と巻き上げて、繊細しい頭を曲げた儘で机の抽出し
に隠してあるリボンで結へた手紙をくるり／＼と繰り返して
居た。

十二時が打つ今年から明年へ時か飛ぶと想像した外形上の
印で有る笑つた金のキユピットの戴て居る立派な時計か千七
百九十二年が終つたと云ふことを宣言する、

そして丁度時計の兩針が重なり合つた時、小さい幻の形が姿
を現はす、半ば開きかけた戸の中から、奇麗な小供が出て来る、戸
の中は化粧室で、其處に寢臺が置いて有る化粧室から這ひ出し

た小供は、寢巻のシャツ一枚で走つて行つて、自分の母の腕にま
つはり附いて、お目出度うムいますと新年の挨拶をする、

『ビニール、新年がお目出度いつて？あゝ難有う、／＼、けれども
お前は目出度い年つて、什麼ものか知つてゐるかい、』

小供は知つてゐると思つた、けれども母は矢張之を確めたかつ
た、

『ビニちゃん、私達の厭な事も心配な事もなくて、年が経つのが
お目出度いんだよ』

斯う謂つて母は小供を抱いて、其寢床に返へして置いて、やが
て自分の坐つて居つた机の前へ歸つて来る、そして先づ竈の上
へ躍ねてる焔を、次いで乾いた花の落ちくる手紙を見る、其手

紙を燃やさなければならぬと云ふのは實にみじめなものだけ
れども到底夫は燃やさずに置かるべきものではないと云ふの
は萬一此手紙が見つかりてもすれば之を書いた夫も受け取つ
た彼女も直に斷頭臺に引渡されるから有る危険に陥るのが
自分ばかり有るものなら彼女は之を燃さないだらうけれど
も罪の宣告を受けて追はれて巴里の向ふの果のとある二階に
隠れてる夫の事が思ひ出される此手紙が只一つさへあれば夫
は追手に捕まつて世話なしに首を刎ねられるに決つて居る思
つて見ると彼女は一生の間刑吏との争ひに弱り果てゝ居る、
ビエールは愉快氣に隣の寢室に眠つて居る料理人もナノン
も二階の自分の部屋へ退いた外は雪が積つて閑寂が世の中を

支配して居る、殿しい清澄の氣は窓に吹き方つて、火焰がパツパ
ツと赤くなる、ジュリ、夫人は手紙を焼かうと決心したけれど
も深い深い悲しい事柄を思ひ出さずには彼女は之を實行する
ことが出来ぬ、そして彼女も夫が容易に實行出来ぬ仕事だと明
かに知つて、知り抜いて居るので有る女は手紙を焼くだろ
う、けれども今一度之を読み返して了うまでは出来ること無
い、
手紙は凡て順々に揃へてある、何に限らず身の周圍を秩序正
しく整頓するのは夫人が生來の性質で有る、
手紙は三年前からのもので既に黄色に成つて居る、夫人は此
手紙を取り出して、夜の静寂の中に再び不可思議な時間を送る

ので有る少くも十度位は繰返へし／＼と読んで、一字／＼暗誦して了うまでは、一頁と雖も空しく火葬にすると云ふ事はない。夜の静けさは未だ其儘で有る。夫人は時々窓の所へ行つて窓掛を擧げて、月に輝く聖ジャーマンデブレの塔を眺める。そして、やがて復び信心深い破壊の仕事にゆる／＼と取り掛かるので有る。夫人は何故に此やさしい手紙の最後を慰まないだらうか。何故に自分の心に之が文句を彫り込まない内に、思ひ出多き手紙を火の中に葬つて了うのだらう。世はまだ静かて有る。夫人の魂は若々しい戀に煽ゆるので有る。

すると夫人は手紙を読み始める。

「側に居なくても、ジュエリーさん私は貴女が見えますよ、私は今

心に湧き来る想像に包まれて路を進んで居る。貴女は今冷たい無神経な人としてゝなく、活潑な生々とした絶えず變化をしつゝも、猶常に完全な人として、私の眼に映つて居る。私は夢の中にユリーさんの戀人は、マア何て仕合な人間でせう。其人には萬物悉く美しく思へるのだ。外でもない。其人の見るもの聞くもの何に限らず、凡ての物の中に戀しい懐かしい人が居るから有る。其戀人を愛することが、其人の樂しむ一生で有つて、彼は戀人の照らす此世を讚歎し、戀人の飾る現世を貴重して居る。實に彼が爲に隠れたる萬の秘密を開くものは戀で有る。彼は常に萬物の形を想像して見る。すると其形は悉くジュエリーさんの表象を有

つて居るので有る彼は又常に自然界無限の聲に耳を寄せて見
 る、すると聲とし云ふ聲は悉くジュリーさんの名を其耳に囁く
 ので有る彼は又喜んで日光の真中を見ることが有る、此難有い
 貴い日の光は、自分と同じく、ジュリーさんの顔をも照らして
 居るので有う、そして世の中で一番可愛らしい人の頬をば撫て
 つ摩りつして居るだらうと、何時もく思ふので有る、今晚も星
 の光が見え出すと、彼は屹度「多分あの人も、丁度今此星を見て
 居るに違ない、左様だらう」と獨語するてせう、彼は空中に
 在る香と云ふ香の中に戀人を吸収し、戀人の歩む其地を接吻せ
 んとさへ願つて居る……

『ジュリーさん、私は斷頭臺の斧の下に仆れて、アルジャイノン、

シドニーの様に、自由の爲に死ぬると云ふのが私の抑の運命で
 有るとしても、死んで了へば、貴女に見えない魂の國に遊行する
 怒りに怒つた私の靈魂は、誰しも左右することは逆も出來ない
 てせう、其時こそはジュリーさん、貴女の所へ飛んで行きませう、
 私の魂は、歸つて貴女の側を飛び圍りませう、』

ジュリー夫人は手紙を読んで夢を見て居る、夜は明けんとし
 て居る、ほの白い光は、最う窓掛を照らして來た朝て有る、下女も
 下男も仕事を始めた、サア夫人は自分の用を終らねばならぬ、夫
 人は何か聲の響を聞いたのか、否々、四邊はまた静かて有る……
 然り、四邊はまだ静かだ、降る雪が路行く人の足音を消すから
 て有る、サア人が來た、外で止つた、戸を敲く音が重たげに聞える、

夫人は手紙を隠し机を閉る暇がない、只々出来得る限を盡す
のて有る手紙を掴んで長椅子の下に隠す、椅子下幕が床に觸る、
二三通の手紙は敷物の上に散在つて居る、夫人は之を脚で長椅
子の下に蹴込んで側に在る本を一冊掴んで椅子の中にゴボリ
と身を投げる、

十二人の槍兵を従へて知事が入つて来る、彼はプロシエと
謂つて刑罰長官で有る、彼は今瘡の爲にブル／＼と震へて、其血
走つた赤い眼は、云ふに謂はれぬ忌々しい風でキヨロリ／＼し
て居る、

知事さんは部下の面々に通路を注意せよと云ふ合圖をして、
やがてジュリ、夫人の方へ向いて重々しい調子で云ふ――

『吾々は、只今丁度其方がピットの代理者や、移住民及獄中の共
謀者等と交通をして居ると云ふ報告を得たのだ、其處で法律の
名を以て茲に其方の文書押収に來た次第じや、一體で其方が最
も危険な種類の貴族だと聞いてから大分になるのだ、左様だ、此
ラボアだ（と云つて彼は其從者の一人を指した）彼が千七百
八十九年の冬の真最中自狀した所によると、其方は彼を買収す
る積で、彼に金と衣類とを與つたさうだ、然るに臆病な上に愛國
心の乏しい市の役人共は、久しく其方に恩典を與へて居たのだ、
が今は代つて吾が輩が主人公になつたからには、其方は斷頭臺
を逃れることは出来ぬぞ、サア其方の文書類を渡したが善から
う』

「貴方御勝手に取らなさいよ机の鍵は外して有りませすから」
 抽出の中には、まだ誕生結婚死亡等に關する文書や商賣人の
 勘定書や地券状などが残つて居る、プロシエは一々之を検査
 した彼は之を爪繰つて見ては、六々文字の讀めない人のする様
 な不審相な顔附をして文書を側に置いて、時々絶叫した、

「無禮な！國王の名が未だ消してない無禮千萬な！本當に！」
 此様子では大將長居をして細々と査るのだらうとジュリー
 夫人は決めて了ふ、遂に夫人は長椅子の側を偷視せずには居ら
 れなくなる、そして直に椅子下幕の下から猫の白い耳程手紙の
 角が喰み出して居るのに氣が附く、此有様を見ると、夫人の苦痛
 は立ちに消えて了ふ、自分の身は確かに失くなつて了ふのだ、と

云ふ考が靜かに念頭に浮ぶと、夫人の顔は本當に安全なと云ふ
 様子と殆んど區別の出來ぬ程に落着いて來る今は自分の眼に
 しか着いて居ない此紙片も直ちに人々の眼に止まるに相違な
 いと夫人は思つて居る、成程赤い敷物の上の白い片は彼女に向
 つて必ず呐喊するだらうけれども夫人は人々が直に之を發見
 すべきか夫とも夫は聊か時間の經つた後なるべきかは推量す
 ることが出來ぬ、此疑が起ると同時に、夫人の心は亂れに亂れた、
 然し此悲惨なる瞬間に方つても、夫人は長椅子の側に寄りつ遠
 ざかりつする槍兵を見ながら自ら一種の戲談に耽つて居る、
 机の中の文書を調べ終つたプロシエは漸くに其氣をいら
 だて、己れ探し出さいて置くものかと云ふ、

彼は家具を投げつけ、額縁を引繰返し、そして劔の鈕を以て壁板を打破つて居るけれども、彼は何物をも發見することが出来ぬ。彼は更に姿見鏡の裏板を打つて見る、素より何物も無い。

一方、斯う云ふ事の有る間に、從者等は一部の床板を擧げて見る、そして乞食貴族は正直な過激共和黨の様な笑ひ聲をしながら、いものだと云ふけれども、誰も長椅子の下幕の下から覗いてる白い紙片を見附けるものはない。

彼等はジュリー夫人を追立て、鍵を出させて他の室の搜索に出掛ける。膳棚を引開ける窓を打壊す、夫から椅子を碎く、家具櫃の中から色んな物を引摺り出すけれども、何にも見附らぬ。

プロシエーは未だ失望せずして寢室に歸つて行く。

「吃度々々、文書は此處に在る、請合だ！」

彼は長椅子の検査を始め、何だか疑はしい所があると謂つて、隅から隅まで劔の先を以て五六回もつゝいて見るけれども、猶求むるものは端くれもない。彼は恐ろしい誓の言を吐いて、從者一同に出發の命令を與へる。

彼は既に室の入口に出て居る。此時彼は一二歩許り夫人の方に立ち歸つて拳を振り上げて絶叫する。

「又遣つて来るから、恐怖ながらに生きてるが好い、吾輩こそは王様なんだから」

そして彼は一番後から悠々と出て行く、遂に一同が去つて了う、階段の足音が段々に微に成つて行く。

のが聞える、夫人は助かつた！彼女の不謹慎も遂に戀人の秘密を發くに至らなかつた、夫人は嬉しさうにニコ／＼と笑つて、スヤ／＼と眠つて居るビエールの所へ走つて行く、ビエールは拳を握つて、四邊には宛がら何の騒もなかつたと謂ふ風で有る、

此處で話を終ると、ラツリプは消えて了つた煙管に再び火を附けて、そしてコツプをガイと空にした、

「ラツリプ君」私は謂つた、正義は徳だよ、そして君は立派な話し家だと謂つて差支ないと思ふ、俺は殊に既に、一度何處かて其話を聞いた事が有るので、一層深い感じが起つたのじや、」

「夫は其ジュリー夫人からお聞になつたのでせう、夫人は非常

な賢い人ですよ」

「そして夫人は何んなつたのじやな」

「執政官時代に仕合な事が有つたのです、けれども夫人は夕方になると、何時も自分の庭の樹に對して、悲しい秘密を囁くに決まつて居ました、御覽の通りに、夫人は戀に對してよりも、死に對して一層の用意をして居たのですよ」

「そして其麼立派な手紙を書いた男は何んなつたのじやな、」

「帝國の下に立派な男爵になつたのです」

「そして小供のビエールは？」

「千八百五十九年に、ヴァーサーユで、憲兵の大佐で死にました」

「オヤ左様だつたね！」

(をばり)

十、エリジアの野

自分には俄然として閑寂の闇の中に運び去られた、そして急ち其處に形の定かならぬ不可思議な数多の物影の顯はれたのを見て、恐ろしさにブル／＼と戰慄した、が暫くすると自分の眼は追々と暗闇に慣れて了つて、足下に水の濁つた川が、勢緩やかに流れて居るのを認め、川の邊りには人間の形をした恐ろしい影のやうな形が立つて居る頭には亞細亞風の縁のない帽子を被つて肩には摺を一本荷つて居る能く見ると頬は凹んで顎には長い白髭が蓬々と茂つて居る、自分は奸計術數に富めるオデセウスだなどと思つた、やがて彼はうめくやうな低い聲で謂つた、

「腹は減る、眼は霞む、魂は丁度闇の中に浮いてる重い煙のやうだ、誰か黒血を一杯飲ませて呉れるものは無いかしら、そして今一度、自分の朱塗の舟と、罪なき妻と母の事が思ひ出して見たい」此言葉を聞いて、自分は地獄に落されたのだと知つた、そして其昔讀んだ数多の詩中の光景を想ひ出して、夫に由つて出來得る限り歩き廻つて見やうと思つて、直に一つの柔しい弱い燈火が光つて居る牧場を的に歩み始めた、半時間許の後、自分は日光の生ひ茂つた所に、一群の幽霊が集つて互に話をして居るのを見た、其中には色々の時代と種々の國々との靈魂が集つて居る、大哲學者等が憐むべき野蠻人等と相併んで居るのも見えた、自分は天人花の蔭に隠れて暫く其話に耳を寄せた、最初に穩か

な愛に沈んだ態度で口を切つたのはピロイで、手には眞の園丁のやうに鋤を握つて居つた、

「魂は何だ」

彼の周圍に立つて居た連中は、悉く熱心な態度で、誰も彼も同時に口を開いて答へんとするので有つた、

「憐れさうな顔附でプラトイが謂ふ、

「魂は三重で有る第一腹の中には、非常に大きな魂が有る、それから胸には愛の魂頭には道理の魂が有る、そして其魂は不滅で有る處が女には魂が二つしかない、道理の魂丈が缺けて居る、」

メーコン會議の一人の親方は之に答へた、

「プラトイ君君は偶像崇拜者の様な事を云ふが、五百八十五年

のメーコン會議では、大多数を以て婦人の靈魂の不滅なることを可決した、また夫のみでない處女から生れた耶穌基督が福音書中に於て人の子と呼ばるゝ様に女はつまり男で有る、」

アリストートルは肩を縮めて、ドツシリとした敬意を籠めた調子で、其師プラトイに答へた、

「先生私の勘定によりますと、人間にも動物にも魂は五つ有ると思ひます、第一が攝生の魂、第二が感覺の魂、第三が意志の魂、第四が食慾の魂、第五が明理の魂、此丈が凡て肉體を形成する要素で有ります、夫て魂が死ぬると同時に體も死ぬるのでムいます、他の連中も互に異つた種々の意見を陳述した、オリゲン「魂は物質で有つて形を有つて居るものだ、」

聖オーガスチン 「魂は非肉體的で不滅なもので有る」
ヘーゲル 「魂は偶然の現象に過ぎぬものだ」

シヨウベンハウエル 「魂は意志の一次的發現で有る」

ポリチシア人 「魂は一陣の風で有る私は自分で死にかゝつた様に思つた時に魂を體の中から逃がすまいと思つて自分の鼻を撮んだのだ處が其撮み方が足りなかつたので私はつい死んで了つた」

フロリダの印度婦人 「妾は赤ん坊の時に死にました丁度其時皆が母の息を避けさせる爲に妾の小さい掌を唇の上に載つけて呉れました處が夫が少々遅かつたので妾の魂は可憐な無邪氣な指の間から逃げて了つたんです」

デカルト 「僕は結局魂は靈的なものだと思ふ夫が果して什麼な性質のものかを知るには、サーケテルムデクピアの著書「人間靈魂の性質」を見るべしだ」

ラメツリ 「其デクピイは何處に居る？ 捕まへて遣らう」

ミノス 「諸君僕は地獄の近邊に居る處で善く彼を捜して見ませう」

アルバートスマグヌス 「左様すると今迄に靈魂不滅に反對説が三十賛成説が三十六あるのです従て可とするものが六人の多數になります」

レザーストッキング 「勇敢なる首長の魂と云ふものは決して死な無ものにて其人の用ゐた戦斧も喇叭も其通りです」

ラビ・メーモナイヅ『物の本に悪人は破碎されて後には何も残らない』と云ふ事が有ります、
 聖オーガスチン『夫は君間違つてゐる、罪人は永劫不滅の火の中に送られる』と書いて有る』

オリゲン『さうです、メーモナイヅ君の謂ふことは間違です、悪人は破壊されずに消滅するのだ、全く小さくなつて見えなくなるのだ、之は罪を受けたもの、事だが反對に聖人の魂は神様に吸収されるのだ』

ダンススコツス『死と云ふものは空中に消える所の音のやうに、萬物をして再び神に歸らしむるものだ』

ポシユエツト『オリゲン君とスコツス君は、夫は不可い言葉』

の中に誤謬の毒が溢れて居る、地獄の苦難について聖書の中に謂つて有る事柄は、正に文字通りに解すべきものだ、罪あるものは絶えず生死の境にあつて死ぬるには強過ぎる、堪えるには弱過ぎると云ふ風で、艱苦に悩まされんが爲に死ぬるにも死なれず、癒すにも由なき恐ろしい痛に抑さへられながら、未來永劫焔の寢床でうめき叫ばなければならぬのだ』

聖オーガスチン『左様です、斯う云ふ事實は文字通りに取らなければならぬ、呪はれたる者の肉體は、一生の間を苦み通すべきものだ、生れると直に死んだり、又は母體に在る中に死んだものも、共に此恐るべき罰を免るゝことは出来ぬ、此が神の裁判の嚴命で有る焔の中に落ち込んだ體が、決して燃え盡すもので無』

いと云ふことが信じ難いとすれば、夫こそ正真正味の馬鹿な證據で有ると云ふのは、例へば雉子の肉の様に火の中に保存される肉が有ると云ふことを知らぬからだ、自分はヒツポと云ふ所で、丁度斯う謂ふ經驗をやつた事が有る、其時自分は一羽の雉子を料理させて半分丈を喰つて了つて、夫から二週間の後に、自分は火の中に入れて置いた残りの半分を食つて見たが、まだ立派に食へた、夫で以て火の中に肉が保存し得られるものだ、云ふ事が分つた、だから呪はれたるものゝ肉も、同様に火の中に持ち堪えることは疑ふの餘地がない、』

るまでに、色々の肉體を移り歩くもので、愈此處に達すると罪業と云ふ罪業が悉く消滅する、ゴータマは佛陀になるまでに、實に五百五十回も色々の形となつて發現し、或は王となり、奴隸となり、猿となり、象となり、或は鳥として、蛙として、若しくは牡丹の樹等として形を現はしたものだ、』

牧師「人間は野獸のやうに死に、野獸も亦人間のやうに死ぬるもので、其終りは同一で有る、兩方共に同じく息をするし、動物に無いものは人間にも有りはしない、』

タシツス「斯んな言葉は奴隸に慣れた猶太人の口によりて始めて聞くべしだ、自分は今羅馬人として發言をするが、有名な人の魂と云ふものは、決して死ぬるものではない、此は充分に

信じ得べきことと有るが神を以て、奴隷や解放されたる奴隷の魂にまで、不死を許すものとするのは、神の尊嚴を冒すものだと思ふ。」

シセロ 『あゝ、我子よ、人々の地獄に就て語る所は、悉く偽りの糸を以て織りたる錦で有る、予は今自ら問はん、予が執政官の記憶こそは、長へに永續するもので有らうか、此以外自分は果して不死のものにて有らうか』

ソクラテス 『自分丈は魂の不滅と云ふことを信ずる、此は實に立派な賭物で有ると同時に、亦何人も以て自ら慰め得る所の希望で有る、』

ヴィクトル・カズン 『ソクラテス君、僕が雄辯を揮つて、滔々と

辯明した所の靈魂の不滅と云ふことは、先づ倫理上必要缺くべからざるもので有る、何故かと謂ふと、徳と云ふものは、演説法上の立派な問題で有ると同時に、若し靈魂と云ふものが不滅のものでないとすると、徳と云ふものが酬ひられないからだ、そして神が若し僕の佛流の趣旨に注意を拂はないとすると、神も眞の神では無い様に思はれるよ』

セチカ 『へゑ、それが賢人とも云はるゝ人の格言で、ムるかな、佛蘭西の哲學者君とやら、マア、善行の報酬と云ふものは、既に之を成就する事にありて、徳に相當なる褒美と云ふものは、徳其者を離れて有るべきもので無いと云ふことを、些と考へて見さつしやれい！』

プラトーン「けれど神の酬と罰と云ふものは有るものだ、人が死ぬると悪人の魂と云ふものは、馬だとか河馬だとか女だとか、何が下等動物の體の中に入り込むものだ、が賢人の魂は之に反して神々の群唱に交ざるものだ」

パヒニアン「プラトーン君は神の裁判は必ず人間の裁判の誤を正さねばならぬと云ふ意見で有るが、夫は將來のことだ、けれども今の處では、間違には陥り易いが、正當の任命を受けて、充分眞理を遂げる丈の能力のある裁判官によりて、不相當ながらも罪の宣告をされた所の人間は、幽霊となつて、其苦痛と刑罰とを忍ばなければならぬ、と云ふのは至當な事だ、此が即ち人間の裁判だ所が其裁判の宣告が神の智恵で以て排棄することが出来

ると云ふことを公然主張するのは、其裁判の力を弱むる様にするものだと思ふ、

エスキモ一人「神は金持には非常に善いが、貧乏人には非常に悪い、之と云ふのは神が金持を可愛がつて、貧乏人を可愛がらぬからだ、そして金持は可愛いから天國に迎へる、貧乏人は可愛くないから地獄へ陥して了ふのだ、」

支那佛徒「諸君人は何人と雖も二個の靈魂を有し、一は善にして神に歸すべく、一は不良にして苦めらるべきものなることを知り給へ、穴賢々々」

タレンツムの老人「お、諸賢庭作りの好きな老人が御尋ねします動物に魂がありますかいな」

デカルトとマレブランシェ「いや、動物は機械だ」
アリストートル「彼等は動物だから吾々と同じ様に魂を
有つて居る、此魂は彼等の機関と關係が有るのだ」

エビキュラス「お、アリストートル、動物の魂は彼等の爲に
仕合せなことには人間のと同じことに朽ちて死ぬるのだ、親愛
なる幽霊諸君諸君が生きたいと謂ふ無理な希望と共に命も一
生の不幸も共に一處に消えて了ふまで我慢をして此庭に待つ
て居給へ、そして何の心配も入らない平和を豫想して安心し給
へよ」

ピロ「命は何だ、」

クロード・バーナード「命は死だ」

ピロ「は更に尋ねた」

「それでは死は何だ」

「誰しも之に答へるものは無かつた、そして群がつて居た幽霊
は風の吹く前に飛び行く雲の様に静かにくふわりく」と忍
び去つて了つた、

自分は日光蘭の牧場で一人ぼつちらに成つたと思つたが、やか
てメニツプスの姿を認めた、彼は大儒教學者の風采をした人で、
絶えずニコくと笑つて居た自分は彼に謂つた

「如何です、今の死人共は全て死と云ふものと知らぬ様な事を
謂つてる、如何してマア、あの連中はまだ世の中に生きてるもの
様に人間の運命と云ふものに就て何も知らないのてせう？」

Yes, yes
that's right very much

スナラフルートナア

自分の間に對してメニツブスは答へた、
「夫は彼の連中が確かにまだ幾分か人間の域を脱せず、とうとう死ななければならぬからた彼等が愈不死の境に入つたとなると、其時には最う彼廢事を話してもせねば思ひもしないだらう、いや屹度一同は神様の様になつて了ふだらうけど」

(をほり)

紫蘭集のちりしちりしたる

あつた、あの奴の如く、わがのまをせしつつけやうな。

アナトール、フランス短篇傑作集終

T. S. S.

これは君自然科學のやせわした事をつたえた言葉だ。

N. N. S.

紫蘭集

明治四十三年二月廿四日印 刷
明治四十三年二月廿七日發 行

「アナトール、フランス」
定價金五拾錢

著 者 若 月 紫 蘭

發 行 者 東 京 市 神 田 區 佐 木 町 二 十 一 番 地 鈴 木 種 次 郎

發 行 者 東 京 市 本 所 區 西 町 十 二 番 地 山 本 銀 次 郎

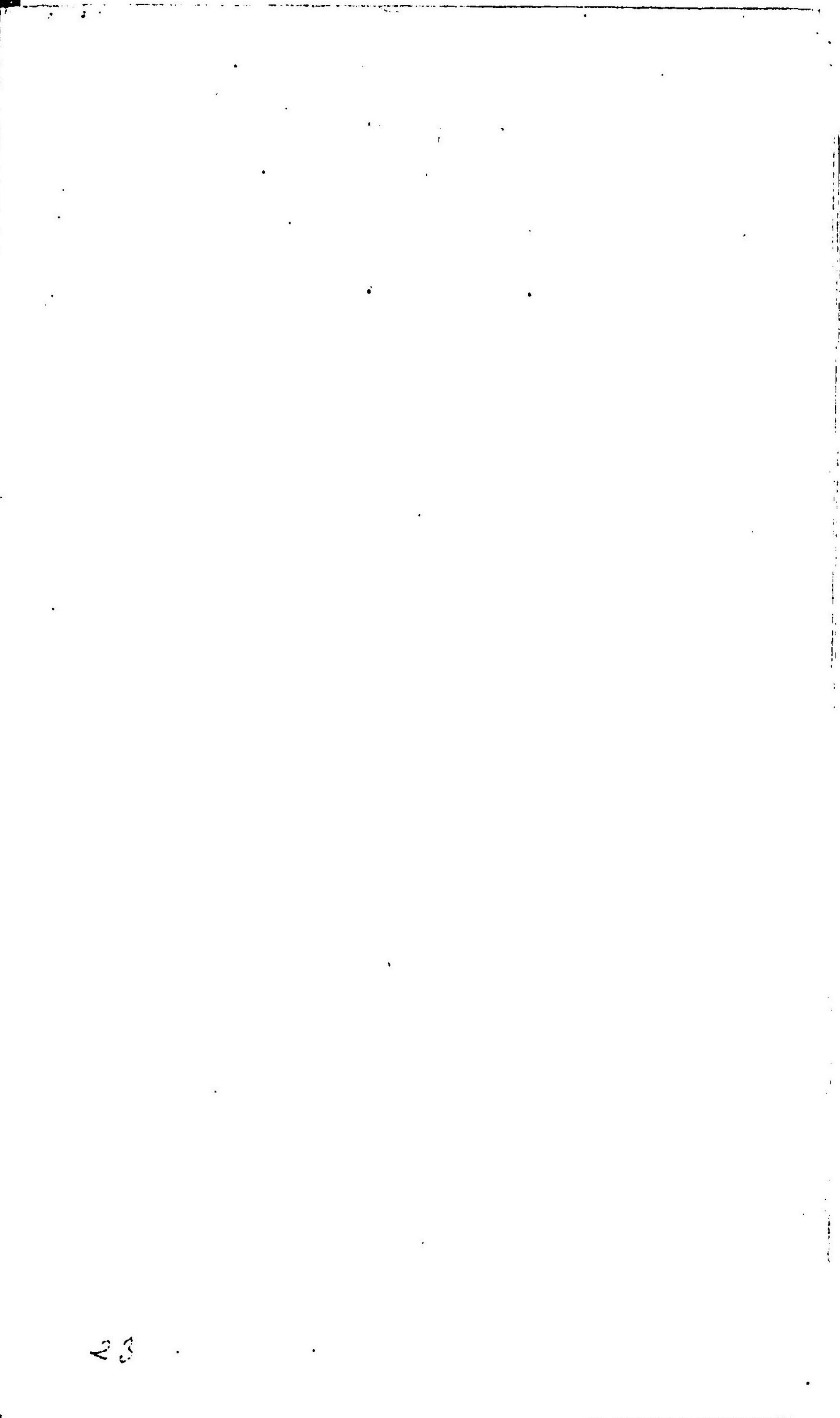
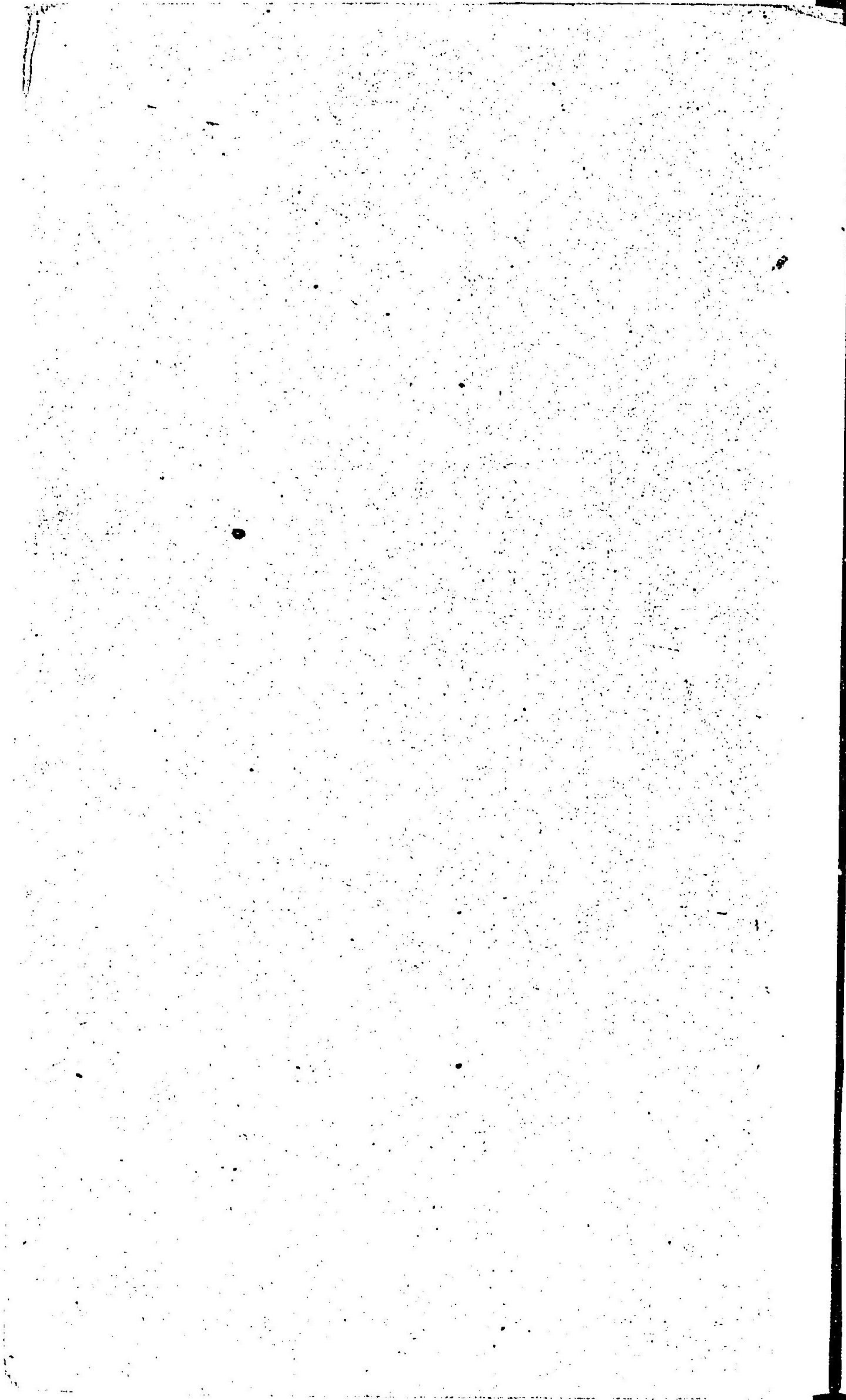
印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 西 掛 屋 町 廿 六 七 番 地 石 川 金 太 郎



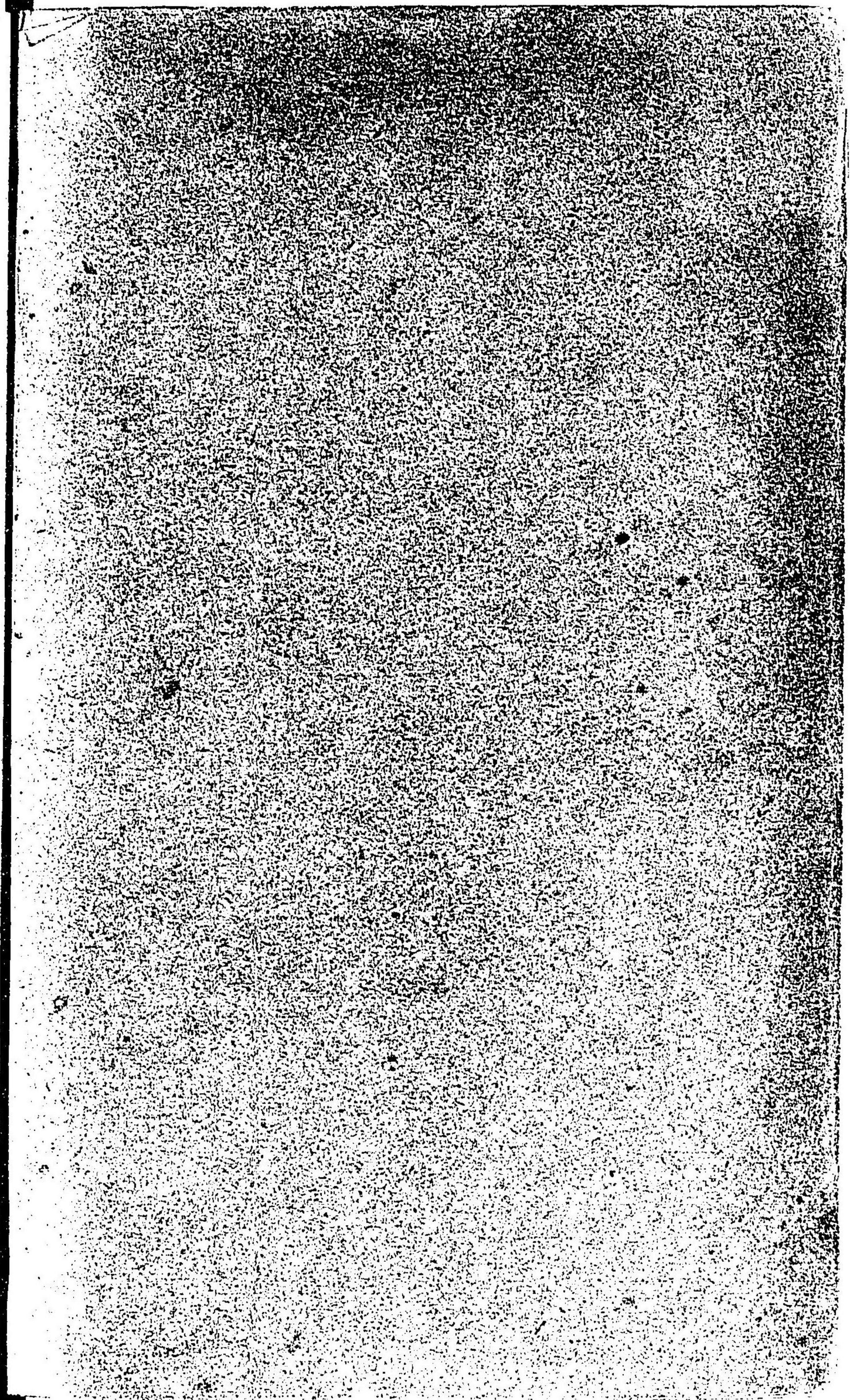
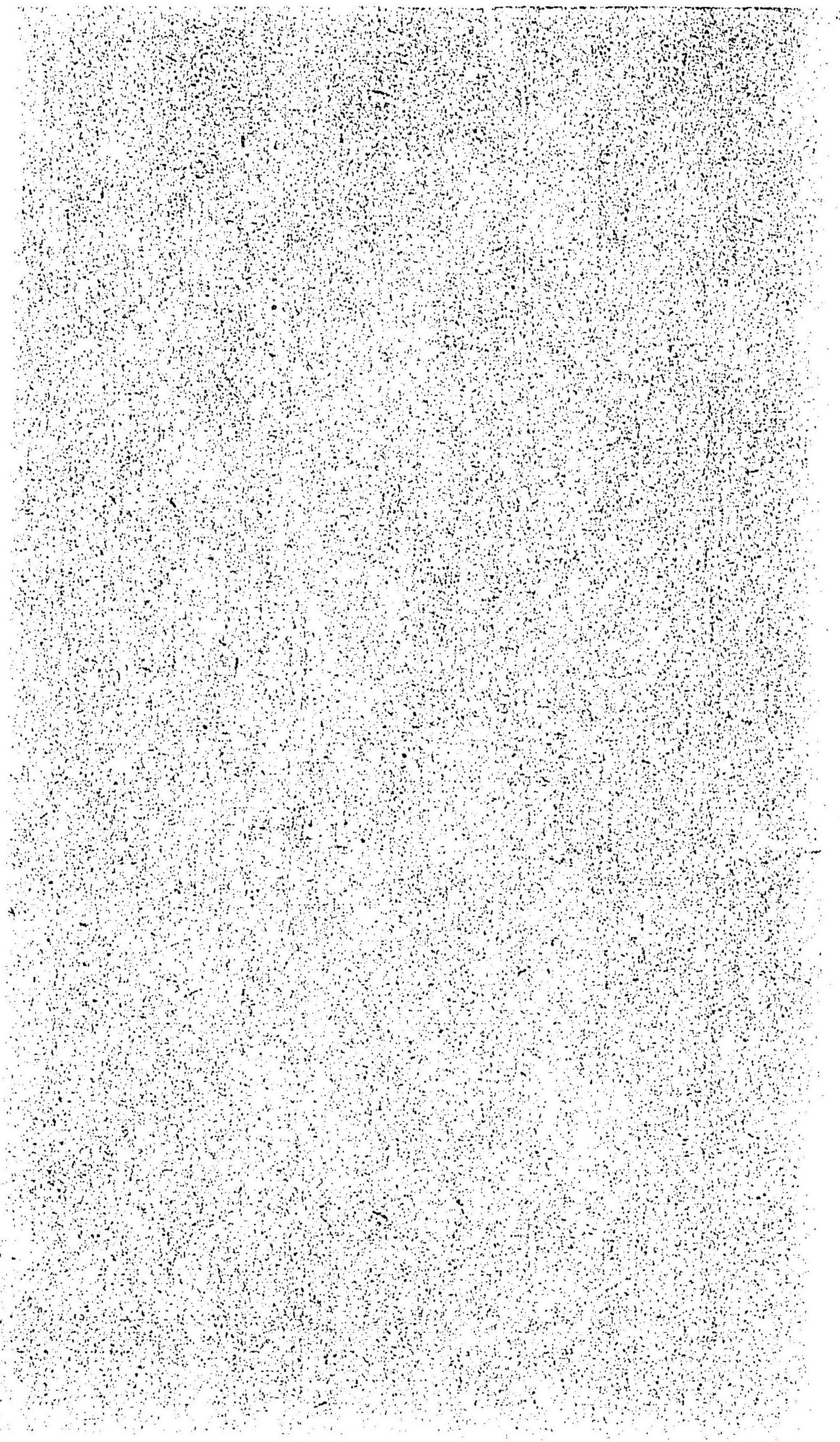
秀英會社印刷

發行所 東 京 市 神 田 區 佐 木 町 三

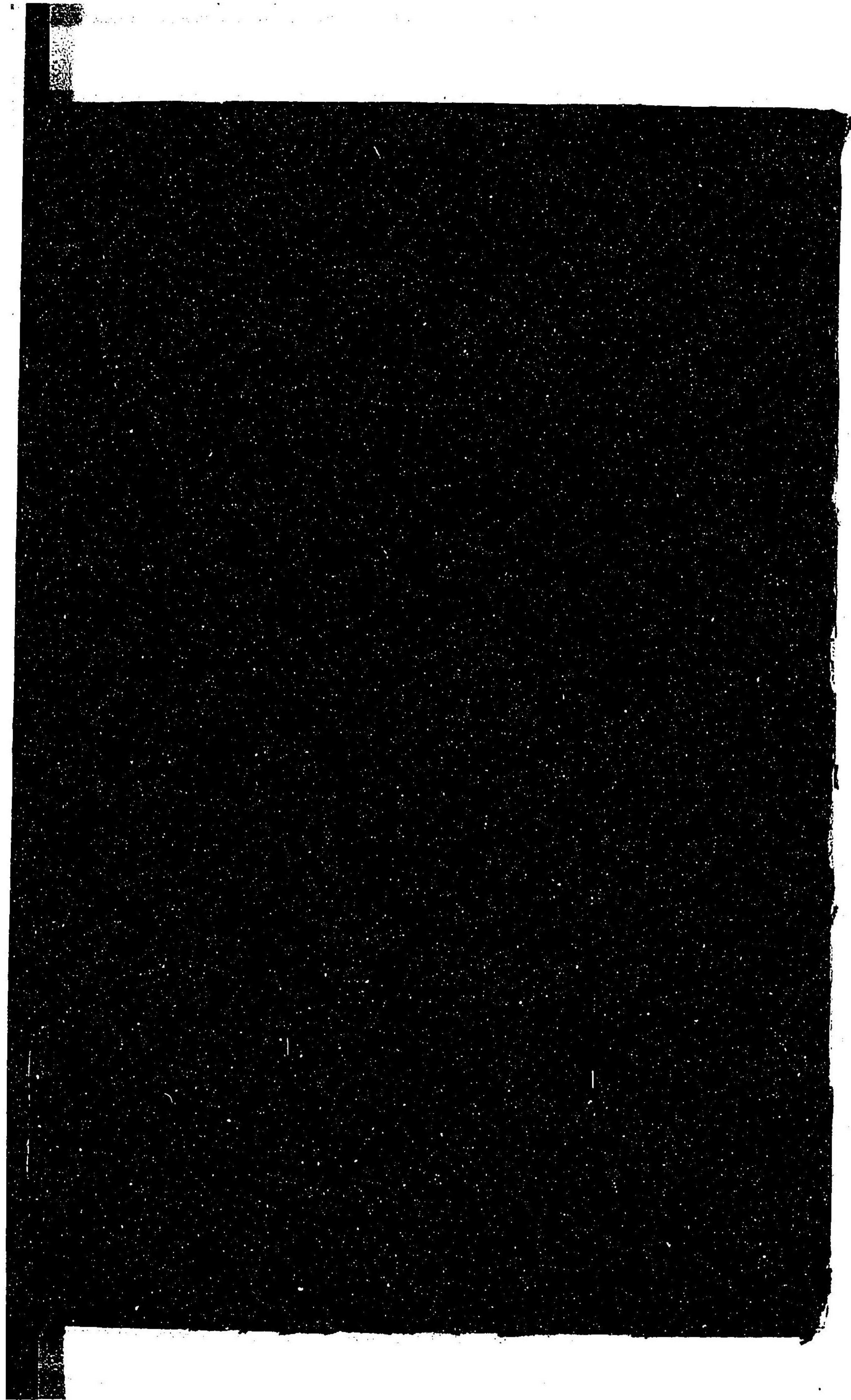
（電話本局三三六一番）
教 書 院
（振替東京四五八〇番）



23



32
444



32
444

100784-000-0

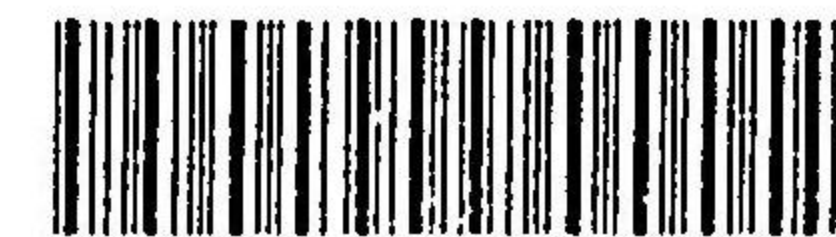
32-444

アナトール・フランス短篇傑作集

若月 紫蘭/訳

M43

DBY-0017



5.7.26